

# 抑制野の検査(補足)鉛筆による方法

参考)金谷まり子:日本視能訓練士協会誌 Vol. 28 P27~28

目的

斜位時における耳側・鼻側網膜の抑制野の簡便な定性的検出

準備物 赤鉛筆 1本・青鉛筆 1本(赤・青の2色になったもの2本でも可)

この前提条件として  
複視がないことだね。  
両眼単一視か抑制だね!



耳(鼻)側網膜に抑制の有無を検査する

\* ( )の中は鼻側網膜の場合

検者は患者の鼻の延長線上約 45cmの位置に青(赤)鉛筆を置き、赤(青)鉛筆を患者側近くに置く

患者に青鉛筆を固視させ、1本であることを確認する

赤鉛筆が何本見えるか?

2本

1本

その位置に相当する耳(鼻)側網膜周辺部から中心窩方向で抑制がない

すでに抑制野に入っている

固視している青鉛筆側に赤鉛筆を移動してゆき赤鉛筆が1本になったら合図させる

赤鉛筆が2本見えるまで赤鉛筆を患者(検者)側に近づけてゆく



1本になった!

抑制野内の耳(鼻)側網膜又はほぼ中心窩に入ったことになる。



2本になった!

抑制野外の耳(鼻)側網膜周辺部に出たことになる。

赤鉛筆が青鉛筆のどちら側にあるか?

例)

ほぼ中央にある!

右(左)側にある!

\* 右眼の抑制の場合

この場合、中心窩までは抑制があるとして。

この場合は、ほぼ中心窩まで抑制がなかった場合で、2本の鉛筆もごく近いはずなので、確認できる。

耳(鼻)側網膜を刺激していたのだから交叉(同側)性に見えているものが消えるはずなので確認できる。

その時の赤鉛筆と青鉛筆の距離を測定する

例)

1.0cmだった!

10cmだった!

25(49)cmだった!

判定基準)

約 1.0~1.5cm : ほぼ抑制はない

ほぼ抑制はない

鼻の延長線上何cmまでに対応する網膜部位が抑制野という表し方となる。



・赤鉛筆が見えて(消えて)いる側の眼が抑制眼  
・その1本なった位置の網膜に対応する位置から中心窩付近までが大よその耳(鼻)側抑制野(単位はcm)

・赤鉛筆が見えて(消えて)いる側の眼が抑制眼  
・その2本なった位置の網膜に対応する位置から中心窩付近までが大よその耳(鼻)側抑制野(単位はcm)



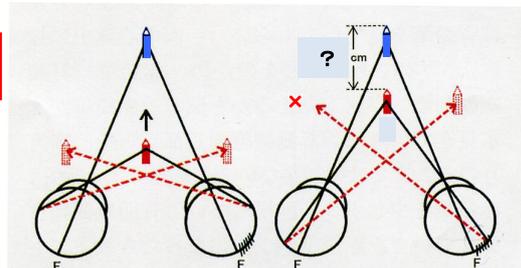
自分の結果を書いておこう!

## 検査風景



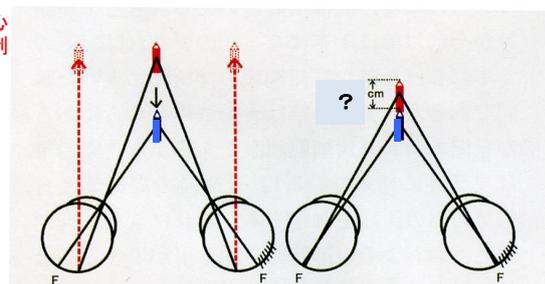
金谷まり子:日本視能訓練士協会誌 Vol. 28 P27

## 例)間欠性外斜視・右眼互側抑制



手前の赤鉛筆が右眼抑制野外を刺激 → 交叉性生理的複視を認知  
手前の赤鉛筆が右眼抑制野内を刺激 → 赤鉛筆は青鉛筆の右側に1本のみ認知

## 耳側網膜の検査(抑制があった場合)



後方の赤鉛筆が両鼻側網膜を刺激 → 同側性生理的複視を認知  
両鼻側網膜抑制(-)のため、青鉛筆後方近くにて赤鉛筆は1本となる

## 鼻側網膜の検査(抑制がなかった場合)

上図 金谷まり子:日本視能訓練士協会誌 Vol. 28 P27 に一部加筆